

20240128 「愛することを教えてください…真実の愛の性質」

I コリント 13:4～8a

牧師 中谷美津雄

<導入>

今日の説教題は、故梶日出男牧師の著書「愛することを教えてください」をそのままとり、副題として「真実の愛の性質」としました。

この本のプロローグに梶牧師が書いている文を飛ばし読みします。

「私は愛の大切さを知っていました。しかし悲しいことに、愛について知りませんでした。愛と思っていた愛は、本当の愛ではありませんでした。……

こんなに愛しているのに、どうすればいいのですか。これ以上、どのように愛せばいいのですか。『愛することを教えてください。』これは、私の若き日の神への叫びでした。

ある日、私の愛が本当の愛ではないことを知りました。……

私が愛していたのは、ありのままの妻そのものではありませんでした。私が愛していたのは、妻のうちにある、私にとって都合のよいところだけでした。それは妻を愛することとは、全く違うことです。ですから、妻の欠点を受け入れることはできませんでした。傷んだところを優しくいたわることも、未熟な点を養い育てることもできませんでした。欠点を覆い隠してあげるのではなく、責め、取り除こうとしました。……

その愛は自己中心の愛で、本当の愛ではありません。それは、傷つける愛、苦しみ悩ます愛、悲しみと不安を与える愛だったのです。」

梶牧師はある日、みことばから不完全で欠点だらけの教会をそっくりそのまま愛してご自身をささげられたキリストの愛を通して、自分の愛が本当の愛ではないことを知らされたのでした。

今年私たちは愛を追い求めることを教会の主題としました。自分では愛していると思っても、実は自己中心な傷つける愛かも知れません。今朝は、真実の愛の性質について I コリント 13:4-8a から学びましょう。

<本論>

I. さらにまさる道としての愛

I コリント 12-14 章でパウロは、御霊によって与えられる信仰の一致と多様な賜物のあり方について書いています。その真ん中に、すべての賜物にまさる道としての愛の章、13 章を挿入することで、12 章と 14 章で展開する賜物についての議論にいのちを吹き込みました。

「賜物」が、何かをする、特にここではキリストのからだである教会を建て上げるために神様から与えられた能力や才能を指すのに対して、「道」は与えられた能力や才能を生かす精神や心を表しています。

何よりも大切な精神を見失ってしまうと、才能や能力がどんなに優れていても、危険な犯罪の道具になり下がってしまいます。道を見失った力持ちは乱暴者になり、道をそれた知恵者はサタンの手先になってしまいます。それでパウロは、賜物についての議論の中に割り込むような形で、はるかにまさる道である愛について教えたのです。

まず、13:1-3 で愛の価値を語り、どんなに素晴らしい賜物であっても、「愛」がなければ、うるさい邪魔物でしかなく、無に等しい、役にも立たないものだと言った上で、真実の愛の性質について、続く 4-7 節で説明しています。

まず 4 節冒頭に愛とは何であるか、愛の肯定的側面を二つ上げ、その後 4 節後半から 6 節までで、愛とは何でないか、愛の否定的側面を九つ上げて、6 節後半と 7 節でもう一度、肯定的側面を 5 つ上げています。今朝は愛とは何であるか、冒頭の二つの肯定的側面から学びましょう。

II. 真実な愛の性質

1. 寛容 μακροθυμία マクロスミア<マクロス：長い、遠い…、テュモス：激しい感情(の爆発)、怒り…)

「寛容」とは、激しい怒りの感情に決して屈しない精神を表します。どんなに不当に扱われても、どんなに侮辱されても静かに忍耐強く受け止める強い心です。

これについては、「やられたらやり返す、倍返しだ」という半沢直

樹のことばが一時期はやりました。職場の派閥間争いに巻き込まれてバカにされたり、侮辱されたりしたら、そのままには置かず、しかもただやり返すだけではなく倍返しで敵をやっつける、胸のつかえがスカッとおりのドラマでした。

屈辱や損害を受けて沸き起こる怒りの感情を押さえなくて、発散させる方が精神衛生上良いという考えもあります。確かにそのような場合もあるでしょう。申命記 19:21 には、「隣れみをかけてはならない。いのちにはいのちを、目には目を、歯には歯を、手には手を、足には足を」と言う戒めがあり、受けた損害と同じだけの返しをすることを認めています。しかし、実際には同じだけ復讐するのを越えて、右の頬を打つ者には左右の頬を打ち返すことになりかねません。

むしろ、心を切り替えて、「右の頬を打つ者には左の頬も向けなさい」とイエス様が教えられたように、燃え上がる激しい怒りの感情を主なる神様にお任せして忍耐して待つ、寛容な愛の精神を身につけることです。そうすることで、隣人との間、一番の隣人である夫婦や家族の間に平和が生まれ、愛が育まれて行くでしょう。

そんな寛容な愛をどうしたら身につけることができるでしょうか。

ペテロが「主よ。兄弟が私に対して罪を犯した場合、何回赦すべきでしょうか。七回まででしょうか。」と尋ねたとき、イエス様は答えられました。「わたしは七回までとは言いません。七回を七十倍するまでです。」(マタイ 18:21、22)

自分に罪を犯した者を赦すこと、しかも2回や3回ではなく、精一杯背伸びして7回赦せばよいのかと尋ねた時、ペテロはイエス様からよく言ったペテロと褒められることを期待していたかも知れません。ところがイエス様は、7の70倍の赦し、つまり無限に赦すようにと言われたのでした。

そんなことは人にはできません。ましてや、感情のままに生きることが良いことだという考えでは到底受け入れられない教えです。それを聞いた弟子たちも自分にはとてもできないと思ったのでしょう。ルカ 17:5 では、「私たちの信仰を増してください(ルカ 17:5)。」とイエス様に願っています。

マタイの福音書でイエス様は、100 デナリ(100 日分の労賃)を貸している兄弟が返してくれない場合、それを責めるのではなく、寛容に赦すことができるためには、自分自身が神様から1万タラント(6千万日分の労賃)もの罪の借金を赦して頂いた者であることをしっかりと覚えて感謝していることが重要だと教えています。

自分の力では決して返すことができないほどに大きな罪の借金を、イエス・キリストは十字架にいのちを捨てる愛で赦し、免除してくださいました。私たちはその大きな恵みをしっかりと覚え、感謝することで信仰を増し加えられ、寛容な愛を身に着けることができるようになります。

2. 親切 *χρηστός* (元来、使用にたえる、役に立つこと)

親切とは元来、「使用にたえる、役にたつこと」表すことばで、「有益で、ぴったりしている」という意味があります。

私が神学生だった時、あるご夫妻から1年に2、3度、神学生たちに大きな段ボール箱に入れた贈り物が届きました。中には食べ物や文具、衣類など色んな品物が入っていて、そのご夫妻から荷物が届くと皆楽しみに箱を開け、手紙を読んでその方たちの暖かい愛に感謝したことでした。忘れられないのが大きな服です。一体どんな人が着るのだろうと思うほどの大きさでしたが、誰かの役に立てばと願いながらそれを入れたご夫妻の笑顔を想像するだけでおかしなことでした。親切が「有益で、ぴったりしている」ことだというとき、何故かこのことを思い出します。このご夫妻の贈り物とお手紙は、神学生たち皆を喜ばせ、暖かい気持ちにさせ、献身の思いを励ましてくれる本当に有益でぴったりした親切でした。

イエス・キリストの有名なみことばにマタイ 11:28-30 があります。

- 28 すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。
- 29 わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。

30 わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

毎日の生活の中、職場や学校や様々な人間関係の中でストレスを抱えて、それを降ろすことができずにイライラを募らせたり、怒りを溜め込んだり、不安や恐れを抱えることはないでしょうか。

一人抱えた重荷を誰にも話せず、どこに下ろすこともできずにいるすべての人々に向かって、イエス様は休ませてあげるから、わたしのもとに来なさいと招いておられます。その招きを信じて、イエス様のもとに重荷を下ろして、平安を得た人々が大勢います。

ある時、教会を尋ねて来たご婦人にこのみことばを読んでイエス様に重荷を下ろすように勧めて祈りました。暗く沈んだ表情をしていた彼女はそれから心に平安が与えられて、抱えていた問題がすぐに解決したわけではありませんでしたが、毎週の礼拝に来るようになり、笑顔になって洗礼を受けました。すると、間もなく、ご主人が礼拝に来るようになりました。妻が明るくなったのが不思議だというのが理由でした。彼も洗礼を受けて、定年退職し、紹介された職場に行きましたが、二度目に紹介された時には、それを断り、教会に毎日来て、奉仕をするようになりました。姉妹も同じように、定年後、二人で教会の奉仕を無休でするようになりました。

彼らの生活、生き方を変えたのは、このみことばです。彼らはイエス様を信じてイエス様のくびきに繋がれてイエス様と共に歩むことで魂に安らぎを得たからに他なりません。

何故、イエス様はわたしたちを休ませ、安らぎを与えることがおできになるのでしょうか。それは、イエス様のくびきが「負いやすい」からだといエス様は言われます。この「負いやすい」と言うことばが、実は、「親切」と同じことばなのです。イエス様は、私たちが重荷と感じていること、私たちの抱えている問題や、直面している試練、悩み、苦しみ、私たちの置かれている状況や必要を、よくよくご存知の上で、私たちといっしょに一つのくびきを負って私たちにとって一番「有益で、ぴったりした」ことをすることがおできになるのです。

人のする親切は、時には余計なおせっかい、いらぬお世話であつたりします。しかし、イエス様は私たちに丁度いいぴったりした

ことをしてくださるのです。

私たちがもし誰かに親切なことばをかけたか、親切な行為をすることができるとしたら、私たち自身がイエス様から親切なことばや行為をしてもらっているからに違いありません。

最後にお遊びをして終わらしましょう。4～8 節 a の「愛」にそれぞれ自分の名前を入れて、声を出して読んでみる遊びです。

4 愛(中谷美津雄)は寛容であり、愛(中谷美津雄)は親切です。また人をねたみません。愛(中谷美津雄)は自慢せず、高慢になりません。

5 礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、苛立たず、人がした悪を心に留めず、

6 不正を喜ばずに、真理を喜びます。

7 すべてを耐え、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを忍びます。

8 愛(中谷美津雄)は決して絶えることがありません。

どうでしょう。アーメンですか？

今度は「愛」のところにイエス様を入れて読んでみましょう。

4 愛(イエス様)は寛容であり、愛(イエス様)は親切です。また人をねたみません。愛(イエス様)は自慢せず、高慢になりません。

5 礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、苛立たず、人がした悪を心に留めず、

6 不正を喜ばずに、真理を喜びます。

7 すべてを耐え、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを忍びます。

8 愛(イエス様)は決して絶えることがありません。アーメンですね。

<祈りましょう>

父なる神様、私たちは自己中心な愛しか持っていない罪人でしたが、神の御子イエス様はそんな私たちをそっくりそのまま寛容と親切な愛で愛していただき感謝します。イエス様から頂いた寛容と親切な愛を隣人にも表すことができるように助けてください。主の御名によって祈ります。アーメン。

- 31 私は今、はるかにまさる道を示しましょう。
- 1 たとえ私が人の異言や御使いの異言で話しても、愛がなければ、騒がしいどらや、うるさいシンバルと同じです。
 - 2 たとえ私が預言の賜物を持ち、あらゆる奥義とあらゆる知識に通じていても、たとえ山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、私は無に等しいのです。
 - 3 たとえ私が持っている物のすべてを分け与えても、たとえ私のからだを引き渡して誇ることになっても、愛がなければ、何の役にも立ちません。
 - 4 愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。
 - 5 礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、苛立たず、人がした悪を心に留めず、
 - 6 不正を喜ばずに、真理を喜びます。
 - 7 すべてを耐え、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを忍びます。
 - 8 愛は決して絶えることはありません。預言ならすたれます。異言ならやみます。知識ならすたれます。
 - 9 私たちの知るのは一部分、預言するのも一部分であり、
 - 10 完全なものが現れたら、部分的なものはすたれるのです。
 - 11 私は、幼子であったときには、幼子として話し、幼子として思い、幼子として考えましたが、大人になったとき、幼子ものことはやめました。
 - 12 今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔を合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知るようになります。
 - 13 こういうわけで、いつまでも残るは信仰と希望と愛、これら三つです。その中で一番すぐれているのは愛です。
 - 1 愛を追い求めなさい。御霊の賜物、特に預言することを熱心に求めなさい。